

# 「継承可能性」、という試み

ながれ

大西 悟 (おおにし さとし/東京理科大学 理工学部 経営工学科 助教)

大学に移ってから5年が経とうとしている。その間、SDGsが賑やかなこともあり、それまで「環境」に関心のなかった学生も、教員も、サステナビリティを日常的に口にするようになった。しかし、もちろん、これまで関連した研究をしてきた先生とその教え子たちは別だが、SDGsを指針に「学び、考え、行動する」人を育てる機運があるかと言えば、その多くは心もとないのが現状だろう。そのような中、私なりに試みてきた教育と実践をここでは述べたい。

## 「継承可能性」としてのサステナビリティ

サステナビリティを、持続可能性と訳す場合、それは規範的かつ普遍的である。未来に理想の世界があり、そこからバックキャストで現在の在り方を模索する線形の世界観がそこにある。そして、その原動力は、西洋の一神教のもとで培われてきた倫理と社会規律にある。そのため、多くの日本人にとっては、建前として理解できたとしても、目の前の行動を変えるほどの腑に落ちた深い理解には届きづらいのではないかと思う。SDGsのロゴの訳を英語の直訳ではなく、自分事するように工夫したとの逸話は、大いに賛同する。

それをさらに促すために、どこか他人事の持続可能性を自分に引き付けるために、訳語として「継承可能性」を持ち出してはどうか。継承という言葉は、誰かが、誰かに、何かを引き継ぐ、ことを意味する。すなわち、自分が主語で、愛する人と大切なものを述語にすることで、自身を通じて解釈することを促す。持続可能性の要求する果てなき時間軸、例えば1000年続く等、へも区切りをつけたい。私

たちにできることは、せいぜい祖父母、両親たちの世代の蓄積を基盤に、子供、孫のために今を積み重ねることだ。そんな人の顔の見える訳語で再構築していくことで、行動を促していこうというのが、今の私のスタンスだ。

もちろん、これは二項対立を意図していない。お互い補完しあえるし、曖昧に使い分けられるのが日本人のよいところだ。その際に、2つの訳語をつなぎとめる考え方の整理が大切になる。私自身、その中身を教材として徐々に発信していこうと思うが、その第1歩を紹介したい。

## 講義「哲学」での実践

2019年度より、法政大学の学部1年生を対象に、「哲学」の講義を担当している。私は、工学者なので身分不相応なのだが、恩人の依頼で引き受けた。話すからには、前述の問題意識を自由に持ち込ませてもらった。まず、最終レポートの設問は、自身で作成し、それに自分に答えてもらうこととした。受験勉強から解放された学生が、社会の動向を自分事に考えてもらう試みだ。もちろん、設問は、以下のように誘導してあり、毎回の小レポートで言語化する訓練を入れている。

テーマは、環境を哲学する意義、工学の環境史観、西洋の倫理と東洋の道徳、地域共創、循環と共生という戦略、実践知としての環境哲学と多岐にわたる。学生も一般教養の単位

1.環境哲学的な問い、2. それに対する回答  
『哲学』の講義を受け、①自身の立場から、②関心のあるキーワードに関心を持った。その理由は、自分が③問題意識を持っているためである。これを思索することで④貢献する対象に対し、どんなことができるだろうか？

[レポート設問]

合わせのつもりが、思わぬ内容で面食らう。小レポートでは、まず、自身の関心を「自分の言葉で書けない」ことに気づく。そして、「問いが広すぎて、何を書いているかわからない」と嘆く学生もいれば、「知っていることと、分かって考えることは違うんですね」と理解する学生もおり、中には新しい行動を宣言する学生も出てくる。最終レポートは、まさに千差万別。誰一人、同じ問いは出てこない。

少人数を想定していたが、1年目の履修者50名はほぼ単位を取り、2年目は90名の履修者になっている。彼らが学年もあがり、社会に出るころにいくばくか役に立てばと思っている。

### 「共創デザイン研究会」の挑戦

もう一つ、地域づくりの、より実践的な教材づくりに取り組んでいる。研究者の仲間3人で「共創デザイン研究会」を立ち上げ、その成果の第一弾として、「共創による持続可能な地域づくりのための20のパターン Ver.1～紫波町の地域づくりをもとに～」<sup>\*</sup>を発行した。これは、地域の状況に薄々危機感を感じつつも、どう動き出し継続していけばよいか、が分からず日々の業務や生活に追われている地域の方々の手助けを意図している。

いわゆる先進地域と呼ばれる地域に、視察に行くと数週間はやる気になっても、「うちには無理だ」と片付けてしまったり、周りを説得できずに終わったり。そんな方々に、自身の地域と結びつける見取り図を示し、それを活用した実践、行動を促す仕掛けを開発していく予定だ。今年度は、調査対象を真庭市、日南市、女川町に対象を広げ具体的な活用方法を構築する。

### イーロン・マスクと中村朱美、

#### そして、継承可能性

ここまで私の小さな実践を書いてきたが、「行動力」について再考したい。サステイ

ナビリティで抜群の行動力を発揮している対照的な二人。一人は、イーロン・マスク。電気自動車のテスラ、PVのソーラーシティ、火星開発のスペースXのCEO、会長として、「人類の救済が必要」との信念のもと、持続可能なエネルギーシステムと別の惑星での文明をつくることに身を捧げ、自家用ジェットで文字通り行動は留まらない。掲げた目標の達成のためなら、何でもする強靱な知識欲と行動力だ。

もう一人は、中村朱美。(株)minittsの代表取締役として「売り上げを、減らそう。」を掲げた“佰食屋”を経営し、持続可能な働き方を実現。業績至上主義が身近な人を幸せにしていない、というまっとうな発想のもとに、ビジネスプランを構想し、専門家にけなされつつも、実現し、継続する行動力。そして、その発想を洗練させたのが、家族の存在だった。ささやかな行動力がしなやかに伝播し、社会を少しずつ変化させていく、そんな強さを予感させる。

サステイナビリティに向けた行動は、地球スケールでの持続可能性と身近なスケールでの継承可能性を追求するものだと、ここでは主張したい。前者は、SDGsやパリ協定の枠組みで否応なく対応が迫られる。その際に身近な生活変化との葛藤は否めないだろう。後者は、自分を含め、身近な人、コミュニティ、景観の変貌への危機感から、より良い選択肢を創り出す。だが、社会の制度・仕組みの再考にまではつながらない、という課題が残る。私は、両者をつなぎとめる具体的な方策を粘り強く検討していきたい、と一研究者として考えている。

行動力の源は、根源的に個人的である。サステイナビリティを持続可能性と継承可能性と訳し分けることを提唱していき、「学び、考え、行動していく」人を後押ししていく。

<sup>\*</sup> 詳細は、検索もしくは[patternlangage@nies.go.jp](http://patternlangage@nies.go.jp)へ